

## 令和6年度 障害者等による文化芸術活動推進事業

公立美術館のエコロジー：障害者等の文化芸術活動の可能性を拡張し、共生社会実現のための象徴空間のあり方を可視化する

### 事業評価レポート

評価者 常盤成紀

本稿は、一般社団法人 HAPS（以下、HAPS）が文化庁受託事業「令和6年度障害者等による文化芸術活動推進事業」として実施した「公立美術館のエコロジー：障害者等の文化芸術活動の可能性を拡張し、共生社会実現のための象徴空間のあり方を可視化する」に対する事業評価レポートである。本レポートの執筆にあたり、以下の通り事業全体の成果検証に関する情報収集を実施した。

	未来の美術館構 想講座	カンファレンス 事業	パイロット事業	アーカイビング 事業
アンケート	質問項目は、令和5年度から継続する事業目標を基に評価者が原案を作成し、各事業ディレクター・コーディネーターと相談の上で確定			
現場視察	Meet Up④⑤⑥ を視察	1日目（ケース ①②③）を視察	展示を視察（ト ークは不参加）	
インタビュー	参加者3名に実 施	1日目参加者お よび2日目参加 者の2名に実施	キュレーター成 相氏に実施	
ディレクターへ の聞き取り				進捗について随 時聞き取り

\*\*\*\*\*

令和4年度の事業開始から一貫した特徴として、本事業は全体が複数の個別事業で構成されている中で、「公立美術館における障害者等の文化芸術活動を促進させる」という全体の目標に対して、事業毎に異なる角度・手法からアプローチすることで相互に示唆や問いを与え合うことにより、総体として目標への応答群の輪郭を浮かび上がらせている。またその事業は、同じ関心を持つ者同士の立場を越えたネットワーキングや互いに相談できる関係性の創出によって、学芸員、市民、アーティストをエンパワメントしていることも強調されるべき点である。令和6年度では事業名称から「コア人材形成」という部分がなくなってい

るものの、人へのエンパワメントやインキュベートは変わらず事業の核となっている。そして様々なレイヤーの人同士が互いに影響し合うことで、状況の形成と呼ぶべきものが目指されていたと言える。以上のような総評を傍証するものとして、以下個別の事業毎に、得られた価値について分析・考察する。

<各事業の定量的実績>

未来の美術館構想講座	実施回数：8回+特別編1回 のべ参加者数：121名
カンファレンス事業	実施回数：2回 のべ参加者数：8館8名（オンライン含む）
パイロット事業	実施期間：20日 来場者数：370名 トーク参加者数：43名
アーカイビング事業	実装に着手

\*\*\*\*\*

未来の美術館構想講座「もぞもぞする現場3- 芸術と障害にかかわるひとたちの、アセンブリー」は、専門知識の有無を問わず、「公立美術館における障害者等の文化芸術活動」に関心を持つ市民が、未来の美術館の在り方を共に考えるコミュニティあるいはネットワークの形成を目的として実施された。前年度までの座学やワークショップが中心だった内容に比べて、令和6年度は具体的な現場への訪問により、視察や実践の機会を充実させた。

のべ参加者数115名のうち、正味参加者数は32名であり、そのうち13名が4回以上参加していた。また15名は令和5年度以前からの参加者である。継続的な参加者によるコミュニティとして事業が成立している部分が大いと言えよう。評価者がある現場を視察した際、ベテランの参加者が新規参加者に対して「あなたはなぜ参加しようと思ったの?」「どんなことに興味があるの?」等と訊ねて自らコミュニケーションを取り、アイスブレイクを行っていた様子が見られた。また他の日には、その回のMeet Up企画運営メンバーが先程とは別のベテラン参加者に書記やグループのファシリテーターを任せることがあった。必ずしも運営と参加者に分かれるのではなく、共に現場を作る姿勢が参加者の間にも広がりつつあるように見えた。

本事業のアンケートは、Meet Up①および和歌山市の本町文化堂で開催された当別編を除いて毎回共通の質問を行った。その中で、【①】「他の参加者や講師等と対話することで、仲間や繋がりができたと感じた。」、【②】「訪問先の取組事例や、講師/ゲストの話から新たな知識や気づきを得ることができた。あるいは自分の問題関心が深まった。」、【③】「もぞもぞでの実践を企画する/準備する/遂行する/振り返る中で、プログラムの企画や運営方法につ

いて、自分なりに考えていく自信がついた。」以上の3つについて、「そう思う」「まあそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「思わない」の5段階で訊ね、回毎の変化を追った。なおこの Meet Up②～⑧でのアンケート有効回答数は80で、回答率は79.2%であった。

アンケート結果は以下の通りである。まず、どの質問に対しても「思わない」の回答はなかった。肯定の回答が最も高かった質問は【②】であり、各回平均すると97.5%が「そう思う」もしくは「まあそう思う」と回答した。次に高かったのは【①】であり90%であった。反対に【③】については73.75%であり、低い数値ではないものの、他の二問と比べると差が開いた。この結果を考察すれば次のようになる。すなわち、参加者にとって具体的な現場を視察したり、様々なゲスト・専門家から話を聞いたりことにより、各自が学びや思考を深めることはできたが（【②】）、それが自ら事業の企画運営について考える自信に繋がったかと言えば、全体として必ずしもそうでない面がある（【③】）。ただし、ここで重要なのは、確かにまだ自信を得るには至っていないとしても、本事業で得られた仲間や繋がりによって、これから先も継続的に悩み合い、支え合える状況が生まれていると認められる点である（【①】）。

本事業の成果を分析するにあたり、出席歴の長い参加者3名に対して各1時間程度のインタビューを実施した。まずA氏は、自身が精神科の医療施設で日々、利用者と造形活動に取り組む中で行き詰まりを感じて、活動の参考になればと本事業に参加した。利用者は楽しそうに見えて、実は自分が独善的に無理やり取り組ませてしまっているのではないかという不安があった。しかし本事業でゲスト講師の話を聞くうち、徐々に自分の活動に自信を取り戻したという。このA氏は本事業で得られた価値として、参加者同士の交流や繋がりを強調した。共に参加する他の人が持つ発想の豊かさや斬新さに、常に刺激を受けてきたという。そして、実施時間外の例えば帰り道などで、自分の悩み事を色々聞いてもらうといったことを通じて、いつしか「もぞもぞが生活の一部」となり、「居場所のような感覚」をいなくようになったと述べた。また、B氏およびC氏は、地域は異なるものの、それぞれ都市部から遠く離れた郊外にある障害者施設で生活支援に携わりつつ、施設内で利用者と芸術活動に取り組んでいる。彼らにとっては置かれた地理的条件からも、仲間を作り、自身の活動にヒントをもらえる人と出会うことは大変有意義であった。

加えてこの3名からは、「学芸員や美術館のイメージが変わった」「アートへの印象が変わった」のように、本事業を通じた既存イメージの捉え直しに関する言及があった。C氏は、「アートは限られた人にしかできない、一部の人のものという意識がずっとあり、アートに対して腑に落ちない時期が長かったが、例えば言葉を使うのが難しい人にも違う表現の可能性を開くように、アートは障害と親和性があるなど感じるようになった」という。こうした気づきは、みずのき美術館やアトリエみつしまなどの具体的な現場を訪問することで得られているが、B氏もまたその体験を経て「(障害者に)できないことにはなく、

別の部分に目を向けたいと、改めて思った」と述べた。そのような実感に由来する気付きが、本事業における対話の質を深めていたと言ってよい。

かように学びや気づきが深まり、また A 氏のように他の参加者が出すアイデアに刺激を受けると、各参加者は本事業への参画に面白みを覚えることが増えていくだろう。他方で A 氏には、そうした状況を客観的に捉えて内省する一面もあった。A 氏は、例えば新しい鑑賞方法について参加者同士でアイデアを交換する中で、「その面白さにのめり込むあまり、（障害当事者ではない）自分たちが楽しいばかりになっていて、障害当事者が置き去りになってはいないだろうか」と反省することがある」と述べた。もっとも本人が補足して説明するには、「もぞもぞ」が始まった当初は「自分たちがまず変わっていこう、そこに障害の視点を取り入れていこう、そうすればみんな自分事になっていくのではないか」という仮説を立てて出発していたという。だとすれば、この「もぞもぞ」というコミュニティは、自分事にするという目標がある種達成し、次のフェーズに入っているのかもしれない。また、そのように出発点を忘れずにいること、自分たちの現状を客観的に認識できてそれを他者に伝えることができることは、今後このコミュニティに新規の参加者を巻き込んでいくうえでも大変重要な条件であると言える。

ところで、評価者が Meet Up⑤を視察した際に気づくことがあった。アトリエみつしまで取り組みたい内容を自由に考える時間で実に様々な意見が出たが、客観的に見てやや発散しすぎている印象があり、ある種大喜利のような状況で、議論の行く末が少々不安になる瞬間があった。けれどもしばらく経ち、Meet Up 企画運営メンバーが「それでは、公立美術館へのインストールという点で何かヒントになるものはありますか？」と軌道修正したことで、最終的にアイデアが形としてまとまった。この、自由な場を最大限確保しつつ、他方で適宜議論のかじ取りを行い、事業の趣旨を放棄することはないというバランス感覚が、参加者にとっての心理的安全性と、達成感とを絶妙に両立させているのだと感じた。加えて、先程取り上げた A 氏の内省は、実は A 氏だけのものではなく、他の参加者とも共有されているという。自分たちが自由にアイデアを出し合うだけでなく、自分たちの状況も冷静に分析し合える関係性や状況は、この事業を企画運営する各メンバーの振る舞いや意識によっても支えられ、担保されているのかもしれない。

\*\*\*\*\*

カンファレンス事業は、主に公立美術館の学芸員を対象とした議論・相談の場として実施された。前年度までは、参加者にとって安心安全な環境で対話ができるように非公開としていたところ、令和 6 年度はこれまでの実績を踏まえて公開事業とされた。また、これまではゲスト講師による事例紹介を軸としていたが、今回は 5 つのアクチュアルな議題（ケース）：  
①「『作品』を受け止める身近な人びと」、②「『表現』を発見・共有するプラットフォーム」、  
③「作家とアイデンティティ」、④「八戸市の版画教育と作品収蔵」、⑤「障害のある人を撮

る」を取り上げて、事業コーディネーターによるリサーチの結果を共有して参加者同士でディスカッションする形式となった。全国公立美術館 157 施設に対して参加案内を送付する中で、1 日目は、参加学芸員 1 名、事業関係者 6 名、京都市職員 1 名であり、2 日目は参加学芸員 3 名、事業関係者 1 名、京都市職員 1 名であった。ただしこれに加えて、記録動画のオンライン視聴という形式で参加した学芸員が 4 名おり、最終的に 8 名の学芸員が本事業に何らかの形で参加することができた。

事業ディレクターによれば「ケーススタディ」とは、福祉領域における手法のひとつで、チームアプローチによる課題検討会のことを指す。ただし福祉の現場では、人（利用者）毎に事例が組まれるところ、本事業では作品批評ベースではなく、障害とアートの領域をめぐる「問い」をベースに議題が設定されることとなった。この手法では、特に問いの立て方や議論の進め方にディシプリンがあるのではなく、「チームで課題にアプローチしていく」という形態が意味を持つとされる。福祉領域でアート活動が盛んになることを「福祉がアートを取り入れる」ことだとすると、「ケーススタディ」の活用は「アートが福祉を取り入れる」ことだと言える。同じ領域で他の事例を取り入れるのはイミテーション（模倣）であるが（もちろんそれは悪いことではない）、他の領域で用いられている手法を取り入れるのはイノベーション（新結合）である。アートが得意なことはクリエイション（創造）であるが、実はイノベーションも求められているのかもしれないと感じた。

残念ながら参加学芸員の数は多かったとは言えず、当初予定していた「学芸員間による」チームアプローチの効果は限定的だったと思われる。他方で、事業コーディネーターをはじめとする関係者も交え、1 日目は 8 名、2 日目は 6 名で対話をするという規模感は、前年度までのカンファレンスと同等であり、これまでと近い密度で場が持たれたとも捉えられるだろう。適性人数の再設定とそのための広報の在り方については再検討を要するものの、実際の参加者にとっての体験は、評価者が実見した限りでも、大きく損なわれてはいないと感じられる。

本事業の成果を分析するにあたり、1 日目に参加した学芸員 D 氏、2 日目に参加した学芸員の E 氏それぞれにインタビューを実施した。まず D 氏について、日頃は専門教育を受けていない独学の作家やアール・ブリュットの作品を紹介する展示を企画したり、美術館のアクセシビリティを向上させる取り組みに関わったりしている。D 氏は参加の動機として、作品ではないもの、例えばその人自体の魅力でもある行為（パフォーマンス）とどのように向き合っていくかに関心があったからだとした。あるいは、福祉の領域でよくあるような、ある人から見ればナンセンスでも当人にとっては必然であるような行為について、当人とそれを受け止める施設との関係に興味があるという。D 氏は常に「(学芸員として作家や作品を) 見出す側の責任」を意識する中で、ある障害のある作家の作品出展をめぐり、その家族が出展を控えてほしいと望んだケース 1 の事例に対して、「身が引き締まった」と述べた。他人による出展は場合によっては見せる側の勝手な振る舞いであるという自覚と日々向き合う中で、紹介された事例は大変印象的だったとのことだ。また D 氏からすれば、日頃他

の学芸員と情報交換する機会はほとんどなく、それは例えば令和 5 年度に参加したカンファレンスでも、案外自分は障害当事者と関わってきた方なのだと知ったと述べた。

次に E 氏について、学芸員として勤務する美術館での経験から、いわゆる美術家のものではないが大変心を打つ作品がある場合に、どのようにそれを美術館が取り扱うことができるのかということに関心があり、参加を決めたと述べた。E 氏によれば、ほとんどの学芸員はまず、今自分たちが取り扱っている美術（作品）に関わる仕事で精一杯である。美術（作品）それ自体がすでに多様である中で、まだ美術史的にも曖昧に位置づけられがちな障害のある人の作品を美術館で扱うことは大変ハードルが高く、少なくとも一個人である自分が彼らの作品の価値判断をすることはなかなか難しい、という認識に立っている。

では価値判断できるためにはどうすればよいか。E 氏は、少なくとも言えることとして、障害福祉の現場や作品をたくさん観て「審美眼」を鍛えなくてはならないとした。その意味で、例えば滋賀県立美術館のような障害とアートの領域で経験豊富な美術館で活動する学芸員であれば、観てきた作品の数やリサーチの量が圧倒的に違出し、作者の「症状」を含めてその作品を理解したうえで価値判断をすることができるだろう。他方 2 日目に参加した学芸員および他の関係者には、E 氏を含めまだそこまでの経験がない者が多かった。そうである自分たちが今後、どのようにアール・ブリュットに取り組んでいくことができるのかという葛藤を他の参加者とは共有できたかもしれないと述べた。なお評価者は 2 日目の録音文字起こし原稿を確認したうえで、ケース 4の方がケース 5よりも議論が闊達であると感じた。そのことを E 氏に確認すると、前者のトピックが美術館事業の事例であり、かつ参加者たちの所属と同じ地方都市（青森）にある美術館であったこと、そして地域の美術活動と美術館とがどのように関わるかという問題を提起した事例であったことから、当事者意識高く議論を進めることができたのではないかと振り返った。

また E 氏は、従来の美術館にある規範に照らして収蔵展示することが難しい作品なのであれば、無理に美術館で取り扱おうとせず、例えば博物館などで、広い意味での文化資料として対応してもらうのもよいのではないか、という見解を述べた。後世に残すべきと思われる作品の行く末を美術館だけで考えようとしなくとも、他の専門機関と連携できればよいとする発想はとても参考になると思われる。

このように、両氏ともに日頃の問題関心に引き付けつつカンファレンスでの議論に参加して、そこで得られた気付きを日常業務に持ち帰っていたことが分かる。また複数名の学芸員が参加できた 2 日目に参加した E 氏であれば、障害とアートの領域では同じステージにいる学芸員同士で葛藤を共有し、また対等に議論あるいは意見交換ができた様子が見える。なお E 氏は、「例えば青森の事例では企画した学芸員など、実際の当事者がその場になかったことで、かえって追加で生じた問いを互いに考え合うことができた。もし仮に当事者がその場にいれば、すぐに答えを聞こうとして互いに議論しようという空気にはならなかっただろう」と述べ、チームアプローチの意義を言語化した。

正統とされるものから外れた作家や作品をどのように扱うかの苦労は共通するが、他方で事業ディレクターからは、「自分は作家であると自認し、他人からもそのように見られているような人もいれば、まったくそのようでない人もいる。ようやく多様なロールモデルが出てきたとも言える」といった勇ましい見立ても提示された。既成の美術概念が揺るがされているということは、新しい価値や可能性が胎動していることでもある。そのように前向きにとらえていくようなムーブメントの兆しが本事業にはあるかもしれない。

\*\*\*\*\*

パイロット事業は、毎回 1 名のキュレーターを招聘して展示を行い、障害とアートの領域における新しい手法を開拓・提示することを目的に実施された。令和 6 年度は、東京国立近代美術館の主任研究員である成相肇氏を迎え、河原町三条にある VOX ビルで「キュレーションを公平に拡張する vol.3 (こどもの) 絵が 70 年残ることについて」が開催された。今回の会場は、前年度までの会場だった東九条にある HAPS HOUSE と比べて人通りも多く、その建物の歴史から美術愛好家や関係者の認知度も高い。また会期も広がったことで、来場者は約 150 名増えて 370 名となった。アンケートによれば、来場者の属性は作家、画廊関係、障害福祉関係、高齢福祉関係、美術教員、研究者、学生などと昨年同様に多様であった。

また来場者からは、「作品自体よりも、それが「児童画」としてカテゴライズされる、価値づけられる構造を見せる展示が勉強になりました。」「普段から、作品そのものと、その背景とを重ね合わせて見がちなのだと思います。」「我々が「こどもの絵」や「障がい者アート」に抱く特別感や自分にはないものを感じる感覚が何なのかがはっきりはせずとも、新たな視点や向き合い方と出会えたと感じた。」(以上すべて原文ママ) という自由記述が寄せられており、キュレーションの狙いに近い部分で鑑賞していた者がいることが分かる。

本事業の成果を分析にするにあたり、成相氏に対してインタビューを実施し、開催に至るまでのプロセスおよび成相氏の意図についてうかがった。まず評価者が展示を実見して気づいたことは、今回の展示が障害とアートの領域における新しいキュレーションのモデルを提示しようとしていたというより、その領域そのものを批評するようなメタ的な展示であると感じられた部分である。これについて成相氏に確認したところ、この社会における「障害者」と「こども」の扱われ方に関する構造の類似に着眼したことで、そのような展示が生まれたとの説明がなされた。すなわち、正統とされるものから低く見られる、あるいは反対に神聖視されるという意味において非常に似た構造になっている。

ただし決定的に異なる点として成相氏が重視したのが、「こども」の分野ではその構造が比較的容易に批判されうる（批判が開かれている）のに対して、「障害」の分野では軽々に物を申すことができない空気や慣習があるということである。つまり、こどもの作品への礼賛に対しては「こどもは天才などではない」という批判が（社会的に）可能なのに対して、

障害のある人の作品への礼賛に対して同じことをしてしまうと、障害者の持つ力や価値を否定するのかと批判されてしまいかねない。またそうなる背景には、障害とアートの領域における批評の蓄積が不十分であるか、まだ広く共有されていないことがある。令和 5 年度においては、美術関係者が福祉の領域に足を踏み入れる際に感じる「たじろぎ」が議論の対象となっていた。迂闊なことを言えば当事者を傷つけるのではないかという気持ちが、専門的蓄積が業界として不足していることに輪をかけて、障害とアートの領域への言及を困難にしている。新しい展示やキュレーションを考える以前に、それを成立させる条件自体を問おうとするのが成相氏の目的であったと言える。

さて、こうした展示を準備するにあたり、成相氏からは事業運営体制に関して、自身の経験を信頼して自由な制作を最大限認めてくれたこと、またそのうえで特に、一人では実現できない福祉施設へのリサーチについて手厚いサポートがあったことへの評価があった。よりよいものを作りたいという「制作の思想」と、安定的に事業を成立させたいという「運営の思想」は時に緊張関係となるが、この「運営と制作の一致」を実現させた背景には、HAPS が常日頃からアーティスト支援の在り方を最前線で思考してきたことがあるのかもしれない。先ほど言及したように、成相氏もまた、この障害とアートの領域はまだ限られた人が関わるものである現状があると考えていた。そして成相氏は、「それをある種力技で広げようとしているのが HAPS であり、このパイロット事業をはじめとする文化庁事業は、アートの側にとっても、障害福祉の側にとっても、互いに「初めて」が生まれる仕掛けとなっているのではないかと述べた。あわせて D 氏もインタビューにおいて、現代美術の分野で HAPS がこの障害とアートの領域で活動している事実はもっと知られてもよいはずだと語っている。

なお E 氏は、今日、例えば合理的配慮の義務化にあるように、それはもちろん当然必要なことである一方、こう言って差し支えなければ「外側からのプレッシャー」によってすべきことが美術館に与えられている側面もあるとした。他方で美術館はこれまで美術のクオリティを担保することに努め、美術館を守ってきたという自負もあるので、外側からやれと言われていたような空気ではなかなか動かないのではないかと述べた。その意味では、常にアーティストの側に立ってきた HAPS が、その立ち位置からこの障害とアートの領域に対して意義や価値を見出そうとしていることは極めて重要なのではないかと思われる。

\*\*\*\*\*

以上、令和 6 年度各事業に対する分析から確認された成果を改めて次の通り整理する。

未来の美術館構想講座では、継続的な参加者同士のコミットメントや相互交流により、参加者にとっての居場所やコミュニティのようなものとして育ちつつあり、その中で悩みが共有されたり、自由なアイデアが交換されたりしながら、未来の美術館を構想する文化が根付き始めていた。またそれを支えるのは事業を企画運営する各メンバーによるバランス感

覚に優れたファシリテーションでもあった。今年度は事業への参加を通じて各自が学びや気づきを深めつつ、それがすぐには具体的な企画実施に繋がらないとしても、継続的な意見交換や支え合いのアセンブリーとして、引き続き参加者をエンパワメントし、インキュベートしていくことが期待される。

カンファレンス事業では、福祉領域の手法であるケーススタディを活用しながら、チームによる課題のアプローチを試すことができた。その真価は、招聘したゲスト講師による情報伝達型の講座ではなく、正解を知らない者同士が対等な立場で議論を深め合うことにあり、参加者もその意義を実感していた。またその議論においては、障害とアートの領域において同じステージにいる者同士の交流という側面もあり、本事業がボトムアップに貢献している姿を認めることができた。参加者数が少なかったことについては、内容の良し悪しをそれだけで判断する前に、案内を出したが参加がなかった対象への聞き取りを始め、リサーチのうえで対策が検討されることが望ましい。

パイロット事業では、障害とアートの領域それ自体を批評するメタ的な展示によって鑑賞者に新たな地平を開くことができたことと併せて、丁寧かつ柔軟な運営体制がその実現を支えていたことも同時に判明した。本事業が3年を迎える中、いまだに根強く存在する「たじろぎ」をどのようにほぐしていくかという大きな問いが改めて残されたと言えるだろう。それは成相氏が述べたように「力技」でこじ開けるものであるかもしれないし、あるいはカンファレンスが積み重ねてきたナイーブなやり取りから答えがにじみ出てくるものでもあるかもしれない。未来の美術館構想講座のインタビューにおいてA氏は、「こういうことはゆっくり時間をかけて、じっくりやってほしい」とした。そして、対話型鑑賞にかぎらず、対話が重要なのはどの世界でも同じであり、未来の美術館を考えることは未来の社会を考えることであるとして、未永くこうした取り組みが続いていくことを希望すると述べた。焦らずにひとつずつ、種をまいたり、考える場を開いたり、何か物事を展開したりと、いろいろな契機が事業全体を通じて仕込まれていることが重要であると言えよう。

なおこの3年を振り返る中で気づくこととして、将来的にはより一層の事業間連携が公式の水準で設計できれば、さらに事業全体でシナジーが発揮されるかもしれない。すでに述べたように、事業全体を構成する各事業で得られた成果は、他の事業に極めて重要な示唆を互いに与え合っている。けれどもそれを認識できるのは全事業に関わっているディレクターに限られ、各事業の参加者が公式に享受できる果実は、それぞれ事業毎の成果にとどまりがちなのが些かもったいなと感じられる。今後は例えば、互いの実践現場として活用し合うなどの有機的な連携も期待したい。

\*\*\*\*\*

評価者は Meet Up⑤を視察した際、参加者に交じってアトリエみつしまの壁をぞうきんで拭き掃除し、最後はそのぞうきんを壁に展示した。この「作業」や「掃除」の意義は参加

者が様々に語っているが、実感として作業は愛着に繋がると言える。ひょっとすると今の美術／美術館／美術作品には、人が愛着を持つ、そのきっかけや回路がかなり限られているのではないだろうかと感じた。愛着の持ち方が多様になることは、美術にとってもよいはずだ。アクセシビリティも実は、あらゆる人にそのきっかけや回路を開くということにも取れるような気がした。近年、社会包摂や社会的課題の解決がアートの領域でも頻繁に主題となる中で、アートは目的なのか手段なのかという新しくも古くもある問いがよく取りざたされるようになった。そうした二項対立を超え、何かの目的のために他の何かが使役されないような社会の在り方を考えていく機会として、この事業の継続を個人的にも応援したいと思う。